

# 万葉集に於ける真淵の年代未詳歌の

## 年代判定について

河野頼人

真淵は「万葉考」に於いて、万葉集全巻にわたる巻次の改訂を試み、流布の巻一・二・十三・十一・十二・十四を古撰万葉集とし、奈良初期以前の歌が集められているとみている。これは、真淵が撰ばれた巻々としての形態上の統一をこの中に求めていることも要因の一つとしてあげられると思う(註)。が又、巻十三・十一・十二・十四といった制作年代未詳の巻々を奈良初以前の歌の巻々として古撰万葉集に組み入れるにあたっては、万葉の歌風の変遷を考察し、撰ばれたものとしての理想の歌風をその六巻中に見出し、と思われるのであって、小稿では、真淵の歌風変遷観によってとらえたものが、年代未詳歌の年代判定の拠り所の一つになつてゐるのではないかと考えたことについて報告したいと思う。

真淵は、歌風の変遷を、集中の歌を時代区分することによって考察している。時代区分して歌風の変遷を考察したのは真淵が最初で

あるが、その研究史上に於ける意義については、扇畑忠雄氏の「万葉集の時代区分」(「万葉」三十五号)に詳しく説かれている。この論文に整理されていることに多く負ふさりながら真淵の諸説を整理していくことにする。

真淵は「万葉集通釈并釈例」(寛延二年・1750)で、

「……是を以て時世のうつり行を知るに万葉にも藤原朝に人万呂  
出て古今に独歩せり赤人は奈良に属せる人にて人まろよりは弱也  
……」(校本真淵全集二〇四頁)

と述べ、人麻呂を高く評価、赤人を弱いとしている。

そして「万葉新採百首解」の序(宝曆二年・1752)では、「いにしへの歌」「中比の歌」「後の世の歌」と三分し、それぞれの歌風を「まこと」「風流たることの極み」「巧」と規定している。

続いて真淵の万葉総論たる「万葉集大考」(宝曆十年・1760)に

於いてもっとも詳細な考察がみられ、

「①いとしも上つ代々の哥は人の其ごころのかぎりにして、そのさま和くもかたくも強くも悲くも、四の時なす立かへりつゝ前しりへ定めいひがたし、

②やゝ中つ代にうつろひて高市岡本の宮の比よりのいはゞ、み冬つき春ざり来て、雪氷のとけゆくがごとし、これをはじめのうつろひとやいはん、

③藤原の宮となりては、大海の原にけしきある島どものうかべらむさまして、おもしろいきはほぞ出きたる、これぞ二たびのうつろひ也、

④奈良の宮の初めには、此いきほひ有をまねひうつせしまゝに、おのがものともなくうらせばくなりぬ、これぞ三たびのうつろひ也、

⑤其宮のなかつ比には、ゆかしき隈もなき海山を、風はやき日に見ながごと、あらびたるすがたと成ぬ、是ぞ四度のうつろひ也、

⑥それゆ後の哥は此集にはのらず、古今哥集に、よみ人しらずとふ中の古きしらべなるぞ、此宮の末ゆ今の都のはじめの歌也、……」(増訂真淵全集卷一の九一〇頁)

と歌風五変説をとっている。これを図示すれば、  
①上つ代々 (仁徳〜推古)  
②やゝ中つ代 (舒明〜天武)  
③藤原の宮 (持統・文武)  
④奈良の宮の初 (元明・元正)  
⑤其宮のなかつ比 (聖武〜淳仁)

とならう。(但し④⑥の間は明確ではない。)これは真淵の研究の

結果到りついた結論であるのである。

そこで歌風の時代交遷を説く前掲の「万葉集大考」の文をみると、真淵は各時代の歌風の変遷を「うつろひ」という語で把握しているが、「うつろひ」とは、変化であると共に下降衰退を意味するものでもあると思う。即ち、扇畑氏もいわれているように、この交遷観を通して、「古代に溯るほど精神およびその表現の純粹な典型を發見」(同氏前掲論文)しているのであると理解出来ると思う。

さて、次に歌に即して述べているものをあげると(以下、特にことわらないものはすべて「万葉考」の用例である)、短歌では、卷二の108頁、

「上つ代下つ代をおもひ渡すに、短哥は此時ぞよろしかりき、」(全集卷一の八二頁)

とある。この歌は「藤原宮御宇天皇代」の標目の所にあるのであるが、又、

「……風流ふうりゅうもおもしろく、……有ふる事のまゝにいひてあはれに、且二首ともに調のうるはしさなど飛鳥岡本宮の始の頃の哥なり、哥はかくこそ有べきなれ、」(卷十二の310頁、全集卷一の三九〇頁)

とあるのをみると、右よりはやや古い所にも目をおいているのであり、これらから理想とする短歌の時代をほぼ知ることが出来ると思ふ。

長歌は、右の卷二の108頁の所の頭書に、  
「長歌は是より前にそよけれ、」  
とあり、卷十三の333頁について、  
「此哥は岡本ノ宮より前なるべし、……その古への哥の中にしも

よくよみしにて、言厚く雅にして面白し、是らの類此巻に多きをとりて集めて唱へ見るべし、さてこそ清御原藤原ノ宮の比に及ては漸劣れるをしらめ、」(全集巻一の二一五頁)

と、短歌長歌の本質を区別して考え、短歌よりは猶古い所に長歌の理想をおいているようである。

そして、これ以後歌は次第に衰退の道を辿つたとみているのであり、「万葉集大考」は奈良初を「うらせばくなりぬ」と、一つの転換期としている。だから、古撰万葉集の大巻が奈良初以前の歌の巻であるとしているということは、ほぼ真淵の理想に近い時代の歌が集められているとみているのである。

では、下降衰退を具体的にはどのように把握しているのであろうか。それには先にあげた「万葉新採百首解」の序で、歌風を古・中・後にわけ、それぞれを「まこと」「風流」「巧」と規定していることが参考にならう。「風流」「巧」としてゐる所にさぐるものが出来るように思う。しかし「風流」という語よって述べられているものが内容面に重きをおいた見方であるのに対し、「巧」は表現技法にふれたものが多いのであって、等質にはとりあつかえない。且つ、「万葉新採百首解」からは「風流」「巧」の具体的な用例は一つも見出せなかつた。それに村田春海の再贈稻垣大平書には、

「末の程に至りては、……万葉の古き長歌記されたるものに、上つ代の歌を味はひみれば、人麿の歌も巧を用ひたる所猶後につく方なりとて、人麿の時よりも猶上つ方を慕はれたる……」

とあって、短歌長歌の本質を区別して考えていたにしろ、真淵が「万葉集大考」などで高く評価している人麿呂をさへもここでは「巧」を用い後につく方であるとして却けているように、真淵の理

想とする歌は年と共に古えへさかのぼる傾向を見せているのである。「巧」と規定しているものにも当然移動する所があらう。しかしながら、真淵の万葉集の諸注釈書を通じて「風流」が殆んど見られないのに対し、「巧」は頻繁に表われており、且つ具体的に表現面を指摘し、歌風の推移変遷にふれる所があると思ふのである。そして「巧」が下降衰退と密接に結びついていると思ふが、ここでは「巧」を主たる拠り所にして述べることにしたい。

麿、人麿呂の近江荒都を過ぐる時の作歌、或いは挽歌について、

「巧みの類ひなきもの也、」(巻一の26、全集巻一の三〇頁)

「こゝにかくいへる巧み、此人のてぶり也、」(巻一の196、全集巻一の二三二頁)

といっている「巧み」は、感情の自然の昂まりに従つた自ずからなる表現であつたのであり、これをさへも却けているのではない。人の心の自ずからなる表出を妨げる方向に働く理智を「巧み」といい、却けているのである。真淵は、

「後世哥は虚言を設て巧とす、古代は実をよくいふを巧とす、此分ちを思へ、」(全集巻一の二九〇頁頭書)

といっているのである。

では真淵は、後世歌、いいかえれば後世ぶりの巧みとはいかなるものを指しているか、「万葉考」によれば以下のようなものをあげることが出来ると思う。

### ○掛詞

入のいほ<sup>カミ</sup>神佐夫等。不許者<sup>イナヒアアラズ</sup>不有。秋草乃。結之紐乎。解者<sup>トキバガナシモ</sup>悲哭。解者<sup>トキバガナシモ</sup>悲哭。

入むすぶといはんとておけるながら此比よりは既に鮑の意をこめてよみ出初しなれど後の世のことくゆくりかにはいひ出さ

るなりV(全集巻三の六七頁)

十九の鳥鶯能。鳴之可伎部爾。爾保做理之。村此<sup>ウツノコト</sup>。宇都呂  
布良牟可。

八……雪とつゞくるには梅はとか梅曾とか何ぞてにをはを加へ  
ていふべきにはへざるは詠此雪をうめと通はせ拙していふな  
らん古くはかゝる言なし下りての哥の働き……V(全集巻四の  
一四六頁)

前歌の「此比」とは寧楽宮(聖武) 天平のころ、石川賀係女郎  
(伝未評)の歌。後者は大伴家持の寧楽宮(孝謙) 天平勝宝五年の  
作。

そして前者、「秋草乃」の「秋」に「飽」<sup>アキ</sup>が掛けて詠まれた例と  
して注意している。又ここで、「後の世の如くゆくりか」ではない  
といっているのは、「秋草乃」が眼前の景物をもって「結之紐」の  
修飾としている点を與と認めているからであらうか。

後者では「梅」に「むべ」「うべ」が掛けてあるとみているので  
ある。古くは見られぬことであり「下りての哥の働き」といって  
いる。後述する「しらべ」を失っているということであらうと思  
うのであるが、真淵は、こゝろした表現を巧みとみ、衰退の因として  
いる。

○ 秀句

真淵は、今掲げた<sup>その</sup>のような例から「秀逸の言はいひ始しなら  
ん」(全集巻四の一四六頁)としてとらえている所謂広義の秀句に  
ついで、  
入の<sup>イノ</sup>梅花。枝爾可散登。見左右二。風爾<sup>カゼニ</sup>亂而。雪曾<sup>ユキゾ</sup>落久類。

八巧める物なり後の哥是より出るならんV (全集巻三の八一  
頁)

十の<sup>ハルビノクノレバ</sup>朝霞。春日之晩者。從木間。移<sup>ウツロフツキテ</sup>歷月乎。何時可<sup>イツトカマタム</sup>將待。  
十の<sup>イノエキヲ</sup>今往而。聳<sup>キケモノノニモガ</sup>物爾毛我。明日香川。春雨<sup>タギツ</sup>霽而。瀧津<sup>タギツ</sup>湍音<sup>セノト</sup>

平。  
八此哥と前の朝霞春日云々の哥は少し後のことほりめけりかく  
すかた意をこのめるよりやう／＼後の世ふりは出来しならんV  
(全集巻二の八五頁)

前歌、忌部首黒麻呂、寧楽宮(聖武) 天平のころの歌。春近きこ  
ろの雪を梅と見まごうとした見立ての巧みを指摘しているのであ  
る。

巻十の二首については、前者、「朝霞」という枕詞を置いて月を  
描いて、「朝」霞と「夕」月を相對した好みを「後の世ふり」とし  
ていると思う。

次に後者について、武田祐吉博士は、川に寄せた望郷の歌で、  
「春雨の降ってはげしく流れる瀬の音を想像しているのが、具体的  
でよい。」(『増訂万葉集全註釈』巻八の六〇頁)と評され、私も  
真淵の理想とした歌の範疇から遠くはずれた歌という程ではないと  
思うのであるが、真淵は、「今」に対する「明日香川」の「明日」  
を「後の世ふり」の巧みとしていると思うのである。

又、古歌の修辭として独自の位置を占める枕詞・序詞についても  
次のようなものには「巧」を指摘している。

○ 枕詞

真淵は、枕詞は本来音調を調えるものであつて、

「音しかよへは幽につくを興とする冠辭の例也。」（「冠辭考」全集卷五の一四三頁頭書）

といっているが、

「上つ世の冠辭は次の語にかゝるのみにて、余情のこもる事はなかりしを、飛鳥藤原の宮のころに至りては、漸さるさまも出来にけり。」（同右全集卷五の一七五頁）

と、枕詞の用法が内容的運接に次第に推移していることに注意してゐる。そして、

七の<sup>シ</sup>紫之。入冠辭<sup>ノ</sup>名高浦之。愛子地。袖耳触而。不寐香將成。<sup>ホスカリナム</sup>  
についで、「袖耳触而」を入こは冠辭よりかくいひ下せる也<sup>ノ</sup>といひ、八かく冠辭の意を下までもいひ下すは奈良に至りての事にて古へならず<sup>ノ</sup>（全集卷二の二八五頁）といっている。これは、「紫之」は本来「名高浦之」にかかる枕詞であるが（「冠辭考」全集卷五の二三三頁）、「袖」にも「紫之」がかかっているといっているのである。これを巧みとしてみると出来るであろう。そして、これを奈良に入つてのことだとしている。

總、枕詞ではないのであるが音調に關わることなのでここでふれておくと、寧楽宮（聖武）天平八年の遣新羅使人の歌について、

十五の<sup>シ</sup>安伎左良婆。和我布禰波弓牟。和須禮我比。與世伎弓於家禮。於伎都之良奈美。

△此哥もおけおきつなとかざねたるたくみ長哥とよもに後の世ぶりなるものなり<sup>ノ</sup>（全集卷二の三八〇頁）

といっているが、「後の世ぶり」としているのは、頭韻をふんで作られた巧みをさしているものである。真淵の理想は、このように作意の目立つものではなかつた。

## ○序詞

序詞についても枕詞と同様の観察を下している。

「新採百首解」に於いて、

十一の<sup>シ</sup>足日木之。山鳥乃尾乃。四垂尾乃。長永夜乎。一鴨將宿。

△右の上の句は序にして、譬をかねたるにやと思ひしに、……今もたゞ序とのみするぞ、古意なるべき、<sup>ノ</sup>（全集卷四の四〇二頁）

とある。「長し」を出す序としてのみ理解して古意に迫ることが出来るとしている。そして続けて、序詞は八片歌てふ体の如く、二句三句のみにていひはたし、を、其のち五句の調を専とする世となりて……上に其ころにまどひなからん詞を設て、五句の調をたし、一首をまかざる<sup>ノ</sup>（同右）ものであるといっている。

十三の<sup>シ</sup>帶乳根矣。母之養蚕之。肩隱。氣衝渡。吾恐。<sup>ココロヲチテ</sup>

とある序詞について、十二の<sup>シ</sup>垂乳根之。母我養蚕乃。肩隱。馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿。異母二不相而。と比較し、<sup>シ</sup>について、△詞ふるくて、且いふせくも有るてふ序なるを、<sup>ノ</sup>といひ、この歌については、

△こまはいふせき意を以ていきづきてふ序とせし後の哥也、<sup>ノ</sup>（全集卷一の一九〇頁）

という。この序詞は他に卷十一の<sup>シ</sup>（人麻呂歌集）にもあり、本来「いふせし」にかかる成句となつていたと思われるが、この例ではその「いふせし」を背後にふまえて「いきづく」の「い」にのみ

かかっている点に巧みを指摘しているのである。(健、卷十三の歌であり「後の哥」といっても奈良初とみてはいると思う。)

さて、以上あげて来た「巧」を真淵は後世ぶりの要素であるといっている。こうした「巧」の入った時期についてであるが、とりあげていう所はかねがね古撰とする六巻以外であり且つ奈良の歌が多く、枕詞については奈良にいたりてとあることによつてみれば、ほぼ奈良初であるとみていいと思う。そしてこれを「うつろひ」としてとらえているのである。勿論、以上いり如き「巧」は歌の発展に必然的に関わることであつて、否定的姿勢でのみ見ることは出来ないけれど、真淵は、この時期に歌風の変遷の一つの区切りをみているということが出来る。

それでは「巧」の介在によつて古歌から失われたものとは何か。真淵はこれを、古歌のしらべといふことで説明することが多い。以下あげる用例はこれを証明してくれると思う。又、今まであげて来た「巧」の例の説明ではこらさら「しらべ」といふ語を用いることを避けて来たのであるが、何れも「しらべ」を妨げる「巧」であつたといつても説明することが出来る。そこで以下「しらべ」について述べたいのであるが、今は年代判定に関わるものとして、「巧」とも関連づけられる位置からみていきたい。

真淵は、しらべが時代によつて推移する点に注意しているが、古歌のしらべの特徴としてとらえたものを一口でいへば歌謡性であると思う。(歌謡性とは、音楽性との關係に於いて生ずる一つの属性であり、文字に托する「読む」文学に対して聞く文学としての性格を表現形式の上を負っているという意味で用いることにする。)

即ち、真淵は、

「いにしへの歌は調をもはらとせり、うたふものなればなり、」  
「いにしへふり」校本真淵全集九六七頁)

といつており、音調声調といつたような音楽的外形的意味が強く意識されている。いふならば、「しらべ」そのものに本質的な文芸価値を認めたとはいふよりは、上古の歌といふものはうたふものであるが故に「しらべ」を重んずべきであると云つて居るのである。(東方博士「近世歌論の体系と展相」)、  
「日本文芸研究」第十巻第四号)つて、このしらべについては表現形式面からの考察が試みられているといふことが出来、これが巧みと共に真淵の年代判定の拠り所になつていふと思う。では真淵は、歌謡性を具体的にはどういふ形式の中にあるとしていふか。

### ○ 発語

「凡うたふ物には助辭發語おのづからある事からもやまとも同事なり」(「万葉集遠江歌考」卷四の三三七頁)  
といつて居る。發語とは「語の上に有て心なき語を發語」といひ、黒きをかぐろきといふ如きを例として居る。猶、枕詞についても、「またこのすかたのごうたはむにも言のたはむときは、上にうるはしきことを冠りしめて調をなんなせりける、」(「冠辭序」全集卷五の一頁)とあり、先に「巧」の所で述べた七の388のように目で味わねばならぬような枕詞の用法は、真淵が古歌に見出した歌謡性を失つてからのものであるとみていたといふことが出来る。

適例ではないが、

十二の3097左檜隈、檜隈河瀬、駐馬。

△左の發言を置て同ことを重ねたる調のうるはしさ……▽(全集卷一の三八七頁)

とある「左」の発語は、「檜隈」のくり返しと共に歌謠性を形成するものとみていたのであろう。そして八哥てふもののみやびはこゝに有めり、√(右同)といい、こうした点に古歌の差の要素を指摘しているのである。

併せ次の歌にもふれておきたい。家持の「天平十五年癸未秋八月」の、

入の155秋野爾。開流秋茅。秋風爾。塵洗上爾。秋露置有。

について、八まふけて秋を四つ重ねたれとるさからて哥の風しらへおもしろ(全集巻三の六一―二頁) といっているのであるが、「まふけて」とあるのに注意すれば、この歌が歌謠性を表現の上に乗っていることをさしているのではなく、古歌のしらべを真似ている点を面白いとしたのであり、前掲の十五の155と同じく「巧」として却けられるべきものであって、この歌自体に高い価値をおいているのではないと思う。この時代には既にこうしたことを「まふけて」しなければならぬ点、古歌のしらべの失われた時代とみているのであると思う。

○ 反復句

前例の157の「左檜隈。檜隈河爾。」、又、  
十三の158の息長之。遺智能小管。息長之。遺知能子管。

八同言を二度いふは古哥の常にて、たゞ唱ふるすらししたしくめでたきを、うたひけん時を思ひはかるべし、√(全集巻一の二二六頁)

二の107 足日本乃。山之四付二。妹待跡。吾立所沾。山之四附二。

八同じ語をかさいいふは、ことをしたしくするにてうひあげた

る時、いとも身に入て覚ゆべきなり、√(「万葉新探百首解」全集巻四の三九三頁)

と、同言のくり返しを古歌の歌謠性に根ざした表現とみているのであって、そして「四」に「うたひあげたる時」とあるのであるから、ある場合には詠われたともみているのではあろうが、現実には詠われた時代であったといっているのではなく、こうした表現が歌謠性に基いていることに注意していると考えることが出来ると思う。

そして注意すべき例は、大来皇女の御作歌、

二の163 神風之。伊勢能國爾母。有益乎。奈何可來計武。君毛不有爾。

二の152 欲見。吾為君毛。不有爾。奈何可來計武。馬疲爾。

八同じさまにて言を少しかへたるは、いにしへ有し一つのさま也、打りひたる時あはれなるべし、√(全集巻一の二一四頁)とある。古えの一つのさまというのは、「打りたひたる時」とあるのをみると、「奈何可來計武。君毛不有爾。」に対する「君毛。不有爾。奈何可來計武。」とくり返しになっていることを指しているのであって、163, 164をそれぞれ独立した歌とみていることは勿論であるが、同時にこの二首は一つの気持を表現したものであり、一つの単位を持つまとまったものと考え、歌謠性を示す特徴と考えているといえよう。

このことについて真淵は、  
「さて古へは思ふ事多き時は長歌をよめり。又短歌も数多くいひて心をはたせしも有。後の人は多くの事を短歌一つにいひ入ぬれば、ちいさき袋に物多くこめたらん如くして、心はいやくしくしらべ歌の如くもあらずなり行ぬ。」(「いにしへふり」校本真淵



▲粟路<sup>アムロ</sup>これは、あはちのと四言によむなり、古歌に四言の句多きは、うたふ時声を引て、五言の調をもなすとみゆ、V(「万葉新採百首解」全集巻四の一八頁)

といっているのも、歌謡性の要素を背景に於いて理解していると考へたいと思う。

以上古歌の歌謡性を、その表現の形式に分類して述べて来たのである。そしてそれは、

「清見原藤原宮の比に及て、哥の調かたく成ぬから事多く交り行まゝに、寛けき此國ふりはややおとろへんとするあり、」(全集巻一の三九〇頁頭書)

と唐事の影響を受けるようになって、ゆたけきしらは衰えようとしていくという。これは、「巧」が介在して来たことと理解することも出来よう。つまり、こうした歌謡性を真淵の理想とする時代の歌の表現の特徴として把握していると思う。

要するに、以上述べたことよって、奈良初を歌風変遷上の一つの区切りとした真淵の考察がみられると思うのである。そして、歌謡性の失われていった最後の時代として、ほぼ奈良初に区切りをみていると思うのである。これを「万葉集大考」の時代区分にあてはめていえば、①②③にあたる所はほぼ歌謡性具備の時代、④以後は、真淵の理想とする時代を中心にするれば、擬古の時代とみていたということができるように思う。(この擬古的ということとは真淵の言ではないが、真淵のいう所からこうように名づけてみても大きく誤っていないと思う。)

真淵は、大凡の基準をこの歌謡性(古歌程歌謡性を濃厚に具備しているということにもなる)と「万葉集大考」の歌風変遷観とによ

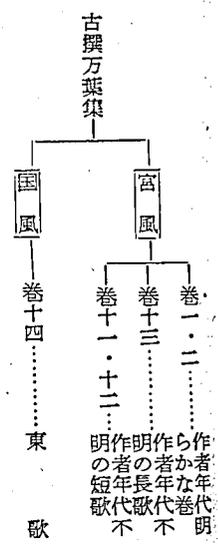
って、年代判定をしているのであると思う。が、今述べたことで推測される如く、具体的年代を指示したものがあっても大體論でしかない。土屋文明氏が、真淵の年代判定は彼の感受性のしからしむる所であって、彼のいう所を信ずるか信ぜざるかの二面しかないように見えると述べておられることは(「万葉集に於ける真淵の年代判定について」、『万葉集私見』所収)、この間の事情を述べておられるのであると思う。

結局、真淵は、巻一・二・十三・十一・十二・十四を一まとまりとしてとらえた時の形態上の統一性整正性を強く重んじ(拙稿「万葉考に於ける本文批評の方法」、「文学語学」二十号においても真淵の統一性整正性を重んじる態度に少々ふれておいた)、それと古歌の理想を歌謡性ということにおいてとらえていることが相俟って、古撰万葉集六卷説が出たのであると思う。この六巻中には奈良初以後と思われるものもあるのであるが、それらは捨象しているのであって、この点大まかであって、ここを指摘すれば、古撰万葉集六卷説は意味のない説であつたともいえる。しかし、古歌を歌謡性ということととらえて、真淵の理想の万葉歌風をそこに求め、その転換期を奈良初にみていることに一意義を認めるのである。

今は、年代未詳歌の年代判定の基となつたもの一つに真淵が古歌にとらえた歌謡性が指摘出来はしないかと、その点に中心をおいて述べてみたのである。

(註)、図にして示しておく。

右の中、入麻呂の歌集の歌を真淵は除いている。麴、卷十は作者



年代共に不明の巻であるが、これをはぶいたについては、長歌短歌が混在していることも統一性整正性を重視する真淵としては考慮の一つとしていると思う。同じ様に、巻七には少数ながら藤原卿（「代匠記」に房前としている）と作者名をもった歌があることが、古撰ではないとした判断の資料の一つになっているのである。

(三十六・十二・十五)

——宇部短期大学講師——